



日本近代文学の出発に欠かせなかった言文一致への試み。  
山田美妙はその先駆者として記憶されています。

しかし、彼の功績はそれだけではありません。

近代文学の確立に果たした美妙の多大なる業績とその波瀾に満ちた生涯を、  
没後百年を記念して振り返ります。

# 草創期のメデアイアに 生きて——山田美妙 没後100年——

とき 二〇一〇年一〇月二日(土)～二〇一〇年二七日(土)

ところ 財団法人 日本近代文学館

東京都目黒区駒場四一三一五五(〒一五三〇〇四二)  
TEL 〇三・三四六八・四一八一

## 記念シンポジウム

とき 二〇一〇年一〇月三〇日(土) 一四時～一六時(開場一三時半)(無料・予約不要)

ところ 財団法人 日本近代文学館 講堂(定員一〇〇名・先着順)

山田有策氏講演  
パネルディスカッション  
十川信介氏挨拶

共催 国文学研究資料館

財団法人 日本近代文学館

立命館大学図書館

早稲田大学図書館

協力 臨川書店

立命館大学国際言語文化研究所

特別協力 山田家遺族



メディアが新しいことを求めるのはいつの世も同じとは言え、明治の山田美妙ほどその波で上下した作家はあまりいないだろう。現在、彼の名は二葉亭四迷と並ぶ言文一致体小説の創始者として記憶されているものの、それ以外の文学上の功績は、一般には忘れられてしまった。

坪内逍遙が主導する文学改良運動の最盛期、彼は尾崎紅葉らと硯友社を結成し、機関誌「我楽多文庫」に小説や新体詩を発表して出発した。才気に溢れた彼は西洋文学に学び、独自の口語文体による「武蔵野」(「読売新聞」明20)で、紅葉に先んじて頭角を現わす。その直前から彼は女性誌「以良都女」を編集していたが、文芸誌「都の花」創刊に当って主筆に迎えられ、硯友社を脱退した。総合雑誌「国民之友」にも「蝴蝶」(明22)で登場、挿絵の裸体画が話題となり、人気は上がるばかりだった。勢いに乗る彼は『いちご姫』をはじめとする小説、多数の新体詩、評論を書きまくる一方、口語文法や『日本大辞書』などの日本語研究、さらに演劇改良にも手を広げていった。大手出版社・新聞社の依頼が殺到した25年ごろまで、彼は得意の頂上にあつた。

だが皮肉にも、彼をどん底に沈めたのもメディアの魔力だった。彼の父は早くから家族と別居し、一人っ子の彼は気性の強い養祖母と母に育てられた。成功した彼はその重い期待からしばしの解放を求めて、私娼の許へ通い始めていた。それが新聞「萬朝報」に暴露されたのは27年秋である。これに対して、彼が創作上の取材だと弁解したため、逍遙は「小説家は実験を名として不義を行ふの権利ありや」と非難し、彼の人気は地に落ちた。醜聞報道は続く。翌年彼と結婚した女性作家・田沢稲舟は、まもなく病いを得て郷里の実家で病没するが、実は服毒自殺だとの噂が流された。その前後の再婚もとかくの風評を生んだが、彼はもう反論せず、30年には祖母や母と別居し、妻子とともに、郊外の王子村・瀧野川村に隠棲した。社会的に孤立し、親しい友もない彼は、都会を去って自分をみつめ直そうとしたのである。

日清戦争前後は、「太陽」「文芸倶楽部」「新小説」などの有力雑誌が誕生した時期である。彼と絶縁した紅葉は文壇の中心にあり、樋口一葉、泉鏡花らが台頭しはじめていた。彼も時流に沿った作品を多数執筆したものの、人気は戻らず、王子・瀧野川時代を通じて注目されたのは、フィリピン独立運動の志士の悲劇を綴った『あぎなると』(明35)にすぎない。家計は苦しく、二世帯の費用は主として辞書類の編纂と借金に頼らざるを得なかった。

しかし彼の創作意欲は衰えなかった。全力を尽した『大辞典』執筆が軌道に乗ったところから、彼はふたたび題材を源平時代、鎌倉時代の乱世に求め、その裏面を描くことに執念を燃やした。初期の物語以来、彼の作品は運命と権力の残酷さ、または敗者の無残な姿が強調されていたが、「四郎高綱」(明39)をはじめとする一連の佐々木源氏もの、『平清盛』(明43)など「史外史伝」と名づけた歴史小説には、勝者敗者双方の心情を包み込む「歴史」の流れが加わりつつあった。自信を取り戻した彼は、祖母の死後、東京に帰り(明41)、やっと安定した家庭生活を味わった。だが不運にも、もう時間は残されていなかった。働きづめの彼を病いが襲い、43年10月24日、頸腺癌腫でその文学一筋の生涯は終わった。

彼が遺したおびただしい自筆資料や諸家の書簡は、長子の旭彦が保存していたが、後に日本近代文学館(塩田良平文庫)、立命館大学図書館、早稲田大学(本間久雄文庫)に三分された。このたび立命館の資料整備が完結し、国文学研究資料館を加えて、四館共同の資料展がついに実現する運びとなった。美妙の全体像を示す貴重な資料が、没後百年にして一堂に会するわけである。これを機に、一人美妙のみならず、草創期の近代文学とメディアの実態があらためて捉え直されることを願ってやまない。

2010年9月

# 草創期のメディアに 生きて——山田美妙没後100年——

## I 詩人 美妙 (幼少期～明治19年頃)



父・吉雄と【明治16.5.6】  
(日本近代文学館蔵)



画本(立命館大学図書館蔵)

## II 流行作家 美妙 (明治20年頃～26年頃)

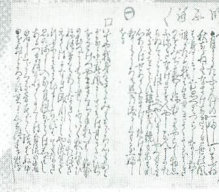


草稿「言文一致論概略」  
(早稲田大学図書館蔵)



「蝴蝶」挿絵  
(「国民之友」明治22.1)

## III スキャンダルから『あぎなると』へ (明治27年頃～36年頃)

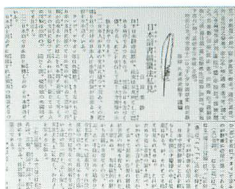


田澤稲舟 原稿  
「月にうたさんげの一ふし」  
(日本近代文学館蔵)



『比律賓独立戦話 あぎなると』  
前・後編

## IV 日本語学者 美妙

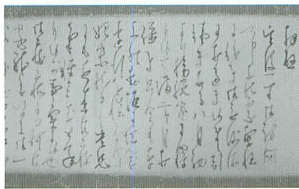


「日本辞書編纂法私見」  
(「国民新聞」明治25.6.12～7.10)



語彙収集ノート  
(日本近代文学館蔵)

## V 復活への執念 (明治37年頃～晩年)



尾崎紅葉 美妙宛書簡  
【明治34.10.9】  
(日本近代文学館蔵)



滝野川時代の書斎  
(「文芸倶楽部」明治37.1)



交通アクセス ●  
京王井の頭線・駒場東大前駅(西口) 徒歩7分

とき 2010年10月2日(土)～11月27日(土)  
ところ 財団法人 日本近代文学館  
東京都目黒区駒場4-3-55(〒153-0041) TEL 03-3468-4181

開館時間 9:30～16:30(入館は16時まで)  
休館日 日・月曜日、10月28日、11月25日  
観覧料 200円(20名以上は100円)